

# 戦火に散ったアスリート

## 大阪タイガース・景浦 将

メーク・レジェンドねえ……。13ゲーム差をひっくり返して巨人が逆転優勝を決めた夜、梅田界隈では茫然自失の阪神ファンが、無言のまま帰路を急いでいた。駅のベンチで「なんでやねん」と泣き崩れていた酔っ払いの姿が、印象に残った。いつの世も、野球ファンは最悪のチームの勝利に一喜一憂するもの。プロ野球73年の歴史の中で、一番最初に関西のファンを熱狂させたのが、大阪タイガースの中心選手・景浦将(まさる)だろう。戦前の職業野球に残したインパクトは、まさにレジェンドと呼ぶにふさわしい。しかし、東の沢村同様、西の景浦もまた、第2次世界大戦で帰らぬ人となった。

(新聞つずみ火・吉岡雅史)

### 巨人軍のエース沢村から 東京 飛び込むホームラン 湾に

遙か昔のスターである景浦の名前ぐらいは聞いたことがあっても、どんな選手だったかよく知らない人は多いかと思う。漫画『あぶさん』のモデルになったことは有名なエピソードだが……。

筆者もそうだが、みんなビツクリするのは、タイガースの初代背番号6が景浦だったこと。タテジマの6といえば、いまや「アニキ」金本が、ファンの期待と憧れを一身に背負っている。

鉄人・金本に対して、景浦の愛称は「闘将(闘将)」。重さ1キログラムもあるバットをブンブン振り回し、リングを片手で握りつぶす怪力の持ち主だった。

職業野球が旗揚げした1936(昭和11)年秋、巨人との優勝決定戦第1戦だった。4点を追う4回、無死一、二塁の局面で景浦は、大エース沢村の決め球で、「3段落ち」と呼ばれたドロップを、洲崎球場の場外に運んだ。推定飛距離150メートルの、東京湾に飛び込む一撃だった。

この試合に敗れ、初代王者も宿敵・巨人にさらわれたが、景浦の

一発にファンは酔いしれた。松山商野球部OB会長の景浦隆男さん(58)は、父・賢一が景浦の弟で、朝日軍(現横浜)の投手。もちろん、隆男さんも大学1学年と野球に打ち込んできた。血統としては申し分ない隆男さんだが、「親父からは、伯父のバッティングフォームを、真似るな。絶対、故障する」と言われていました。もともと、練習の時の映像を見たことがありますけど、リストが強くないとできないスイングで、とても真似なんてできませんよ」と、あきれ顔で話した。

戦後生まれの隆男さんは、当然ながら伯父・将に会ったことはない。しかし、酒に酔った時の父親から、武勇伝を繰り返し聞かされてきた。

### 打ったあと、打席付近で ボールの焦げる臭いが：

「打ったあと、打席周辺でボールの焦げる臭いがした」こと。「監



景浦の甥の隆男さん

投手としても一流だった景浦 督と確執があつて、飛んできた打球を追わなかったことなど。

特に、ホームランを打って、ベンチに向かって指を一本立てながらベースを一周したのは「10円いただき」という念押しだった。大卒の初任給が40円の頃である。バッティングでも豪傑だった。プロ1年目は投手として最優秀防御率(1・05)と最高勝率(6勝0敗)のタイトルに輝いた。翌37年は、春は打点王、秋は首位打者を獲得し、「4番ピッチャー」も何試合か務め、タイガースを日本一へ押し上げた。

闘将の原点は、松山商時代にすであつた。中学5年の春に選抜優勝、そして夏の甲子園でも決勝進出。同点の9回裏、ライナーを左ひざに受けて骨折するが、ベンチには引込まずサードを守った。中京商のバント攻撃に耐えたが、

## 4番バッターで、ピッチャー 打点王、首位打者、最優秀防御率



戦前の球界を席卷した景浦の豪快な打撃フォーム

延長11回、とうとう動けなくなつた景浦の横を、サヨナラの打球がすりぬけていった。春夏連覇は逃したものの、景浦の闘志は観客の心を打った。「豪快なイメージばかりが伝えられてますが、性格は逆だったみたいですよ。とても家族思いなところがあつたと聞いてます」と隆男

さんは話す。そもそも立教大学を2年途中で退いてプロ入りした理由も、実家の製材業を支援するためだった。しかし、その2年間にも、景浦はチームメイトに豪打を示していた。立教といえば、のちに長嶋茂雄が入学するが、「飛距離では景浦には到底及ばない」と、OBたちは口をそろえたという。

話を大阪タイガース時代に戻そう。契約最終年度となるはずだった40年に景浦は応召された。43年に復帰したが、登板することもなく、2割1分6厘と自身最低打率を残すと、松山に戻って家業を

継いでいる。大スターの幕引きにしては、あまりにもあつけない引退劇だった。

同じ血が流れている隆男さんは、こう考えている。「戦争のせいで、もう以前のようなプレーができなくなつたんだと思います。ライバルだった沢村さんも、戦場で肩を壊してますし……。自分本来のプレーをファンに見せられないから、ユニフォームを脱いだはずです」

2度目の召集令状が届き、終戦の年にフィリピンに送り込まれた。

約64万人が投入され、その8割が戦死した悲惨極まりない戦地へ。食糧補給を断たれ、さらにマリアの高熱にうなされながら景浦は食糧を探しに出たまま、消息を絶っている。終戦の3カ月前だった。

景浦の遺骨は、日本に戻っていない。「小さな骨壺に白い石コロみたいなのが3つ入っています」今さらながら、戦争をおっぱじめた連中に、「なんでやねん！」と問いたただたくて、ならない。

## 景浦の遺骨は「石コロ3つ」

### いみせのヨコシマ文化論 日記

